

## 私の修行時代 「警視庁剣道部で過ぎた日々」

教士八段 佐藤 安治  
(埼剣連審議員)



私が剣道をはじめたのは中学からで、その後、宮城県では名門と云われる小牛田農林高校に進み、本格的な剣道修業のスタートを切った。高校の恩師、高橋要先生とその師乳井義輝先生、良師に恵まれ、数多くの大会・試合に起用され、3年間の高校時代を送ることが出来た。

当時の高校の道場は、何故か窓ガラスが無く、冬は前夜吹き込んだ雪を掃き出し朝稽古を続けたことが懐しく思い出される。厳しい高校時代だったが、2年生の秋田国体(昭和36年)での優勝等実り多き3年を送ることが出来たのも良き先輩と同僚に恵まれたからである。

中でも、千葉仁範士は小学校からの同級生であり、私の剣道人生でかけがえの無い友人であり、いろいろな面での師でもある。

その後、彼と共に警視庁に入り、一年間の警察学校生活を終えて機動隊に配属となり、昭和39年3月から、対外試合候補(特練)に指定された。千葉範士は全日本選手権大会3回優勝等の輝かしい活躍をしたことは、皆さんご存知のとおりである。

私は、昭和41年に「武道専科」という、柔剣道を始めとする術科の専門的な指導者を養成する一期生として入校した。担当師範の小川忠太郎先生、教師の谷崎先生のご指導のもと、剣道はもとより、古流(一刀流)、居合道、杖道、座禅、一般教養と多岐に亘るものであった。この武道専科は全員武道館に宿泊し、中でも一刀流の組太刀、一刀本の稽古は夜中2時から6時迄行われ、朝食後の9時から午前中の稽古、そして午後の稽古と、これが一週間続いた。まるで夢遊病者の様に居眠りしなから稽古したことを思い出す。

武専を卒業して特練に復帰し、厳しい訓練の再開となった。とりわけ、特練での稽古の思い出の最たるものは、2時間の立切稽古で、ご存知の方も多いと思いますが、懸り手は何でも有りで、元立をいかに早くギブアップさせるかというものであったが、その年の監督は森島先生で、私をはじめ3人の元立には「死ぬ気で立て」、懸り手には「最後迄立たせたら承知しないぞ」と云う凄まじいものであった。

季節は7月、始まって40分位で先輩の一人が潰れ、残りは私と渡邊哲也先輩(範士)で、何とかその荒業を乗り切った。その時の2時間は、始まって30分位で足がつりそうになり、一時間位では意識朦朧となったが、ところが、あと30分位になると勇気が湧いてきて、なんと身体がだんだん動き出した。立切で得た貴重な体験であった。この後もう一度立切を経験したのですが、今日あるのもこうした厳しい警視庁の稽古環境のお陰と心から感謝している。

明治10年、西南の役での警視庁抜刀隊の活躍が警視庁武道の始まりであったと聞いているが、以来全国から著名な武道家を登用、現在に至っている。現在の稽古状況は、朝稽古7時から40分間、そして午前、午後の稽古と一年を通して続けられている。朝稽古は一般の参加も多く、盛況である。

その後、指導室にあって、助教・教師・師範へと立場を変えながら、選手としての活躍を目指す意識の高い特練生との充実した稽古を心がける中で、当然、自己の健康管理への気配りも日々大切にしたところであった。

昭和57(1982)年10月から6ヶ月間、全剣連の派遣でドイツへの指導の機会を得た。以来、このご縁でたびたび指導の機会があり、今回(5・14~5・29)が8回目の訪問となったが、現地剣士たちの学ぶ姿勢や真剣な眼差しを受け止めては心打たれるものがある。

指導者の資質が問われている昨今、一層気を引き締めて後進の指導に当ることが恩師並びに暖かく迎えていただいた埼剣連の恩に報いることと思いを新たにしているところです。



昭和41年 武道専科一期生(前列左に私)